

昭 和 を 生 き る (※1)

中第 34 回卒 佐藤 善祐 (※2)

昭和の初期と言え、金融恐慌や満州あたりの排日運動で訳の判らん思い出がある。

そんな頃の昭和6年正月「どのようになろうと、自分の能力がどんな程度か知って置きたいので、相中の受験だけはさせて貰いたい」と願ったのであった。

「馬鹿なことを言うもんでない」親父さんの返事は思った通りです。両親は共に熱心な念仏者であり、私は現実的な良き師や多くの同僚を求めての、わが幸福の追求だけです。共に生きる道は、「何か欲しいものはないですか」で互に欲しいものを提供し合うことであろう。

機械化とか大量生産による売りつけの思想で摩擦を増大させてはならない。暖衣飽食や中流意識によって、意欲や気力を減退させてはならない。不安や孤独からの脱却には哲学や宗教を学ばねばならない。

社会的要請に目配りを怠らず内にあっては学問の力を蓄積し、全世界を相手に21世紀を目指して、確固たる基盤を作れの声があり、残された20世紀の歩み、つまり昭和を生きる歩みとしたいものである。(農 業)

(※1) 創立90周年記念誌『紅の旗』 (1988(昭和63)年9月2日発行)

「我等OBも頑張っているぞ!」より。

(※2) 大野出身。昭和11(1936)年卒。

(転記&※脚注 村山)